

友林蘇岐

(一)



學術

挿條試驗

江波多

左の一篇は前任地仙臺市に於ける調査にして土質氣候其他の關係上之を本縣下に適用して同一の結果を得べきや否やは頗る疑問に屬するも唯各調査事項相互の關係に就きては其概念を窺知するに難からざるべきを信じ成るべく無味なる數字を畧し大要を掲ぐる事とせり

試験に供せし挿穂の長さは針葉樹は三五乃至四〇厘の者を用ひ地中に大凡五乃至一〇厘挿入し又「P」は長さ平均一五厘の者を用ひ地上部五厘弱を露出して他は土中に挿入し何れも日除を施し滿一ケ年後に其生着本數幹長。根長。及各重量を調査比較せり試験地は粘質壤土なり尙詳細の事項は擱筆する事とせり

第一に左記樹種に就き挿條によりて生着如何を二ケ年間同一方法によりて試験を繼續し其結果を平均し挿付本數に對する生着本

數の割合を得たり

扁柏	二九%
羅漢柏	二八%
公孫樹	二二%
ネズコ	一五%
「ツヤギガンチャ」	八五%
「キユブレサスロソニアナ」	六三%
「ユニベルスバージョニアナ」	七二%
「ユニベルスコンミニユニス」	七七%

而して發生したる根の全長は滿一ケ年後に於て一二乃至二五〇にして挿付後三ヶ月にして既に細根を認むる事を得べし唯扁柏は一ケ年の終末に於て僅に生着本數の約二割の新根發生を見るのみにして滿二ケ年の終に於て初めて全部の發育を見るに至る

次に杉樹に就きて挿穂が昨年伸長したる枝即ち滿一年生枝なるか或は一昨年發育したる枝即滿二年生の枝か又は三年生枝條等挿穂の年齢によりて挿及入部の尖端を小刀にて平滑に切去したるか或は單に手を以て引き裂き其儘挿付けたる等挿穂の作り方の如何により生着及發育上に及ばず關係を試験し左表を得たり但し同一試験を二ケ年繼續し二回の平均數を掲げたり

明治四十四年六月二十五日印刷
明治四十四年六月二十七日發行
編纂兼發行人 安井正夫
長野縣西筑摩郡福嶋町四〇番地
長野縣松本市本町百八拾四番地
印刷者 鬼澤忠雄
全縣全交文社
印刷所 香地
發行所 蘆澤書店
長野縣西筑摩郡福嶋町二八九番地

○本誌目次

- 學術、挿條試驗 森林火災の防
- 書 八月林學士森林行政論
- 拔萃、林業年中行事 七月の部
- 文苑、日記 一茶勸農詞 和歌
- の浦 修學旅行日誌
- 和歌
- 學校通信
- 寄宿舎より
- 雜報

小刀切去三年生枝	七〇%
搔除三年生枝	七七%
小刀切去二年生枝	六二%
小刀切去一年生枝	五七%
搔除一年生枝	六二%

上表の數字は挿付本數に對する生着本數割合にして尙挿穂の發育の狀況根の長さ重量其他の成績を比較對照するに左の結果を得

- 一 挿穂は年齢の多き者成績佳良なる事
- 二 小刀に切去したる者より却て搔除したる者結果良好なること

次に挿付の季節により生着及發育上に及ぼす關係を試験せり但し樹種杉にして試験回數は二回にして左に挿付本數の生着本數に對する割合の平均數を示せり

五月後期挿付	六一%
六月前期	四二%
六月後期	三九%
七月前期	三〇%
七月後期	四七%
八月前期	三四%
八月後期	三〇%
九月初期	四三%
九月後期	三三%

以上の成績により捕獲は五月或は夫れ以前に於て良好なる結果を得べきも夏期又は秋期に於て捕獲するも尙幾分の生着本數を得べし。

捕獲造林によれば捕獲の採集に少なからざる經費を要するを以て種子より苗木を仕立つる場合に要する經費と比較研究するは興味ある事なるも既に堀林學士の大日本山林會報に調査を報告せる者あれば擧筆す。

森林火災の消防

原文は千九百十一年一月發行「アメリカン・シホレストラー」の記載にして茲に拙譯して紹介せんとす

小松吉次郎

- 消防法 森林火災を消火する方法は市街に於ける火災と同一の取扱を要するものにして必要なる要件は次の如し
- 1 迅速に火災地に達すること
 - 2 消火に十分な人力を有すること
 - 3 消防に必要な器具を備ふること
 - 4 消防の組織を整ふること
 - 5 消防に熟達すること
- 之れなり
- 迅速に火災地に達すること、迅速に現場に到着せんには未だ火災の猛烈に進行せざる以前に森林看守又巡視者が發見し完備せる通信機關を森林内に設置して通報をなす
- 消火に十分な力を要す、小面積の火災はよく一人の力にて消火し得るも、稍擴大なる森林にありては現場に到着するに多くの時間を要するを以て多人數の力によりて消火し得べし巡視組織の完備せるものによりては看守人は火を發見すれば直に他の巡視に報じ監督者に急報す電話信號其他適宜の方法を用ひし消防に必要な人員を集むることに勉む森林労働者、附近の住民及び隣接所有者の一致協力によりて消防に従ふ

或地方に於ては森林消防隊の組織ありて附近の變事に應じ協力して消火す此消防隊は火災に當りては速に現場に馳せ相救ふの義務を法律上規定せるものなれば一方又此れに應分の報酬を與ふべきこと共に一國の法令とせり大森林の火災には此等の外森林内外に住居せる人々を集め一致して消防に従事すべき規定ありかざる場合には伐木夫、水車夫、土工人夫等最も多く用立つ「ワシントン」、「モンタナ」州等に於ては消防組織完備して森林火災豫防協會の如きものありて廣大なる「ホワイト」松の森林を監督し火災を採消して災害を防ぐこと屢なれば今や西北部各州の森林所有者は斯會に加ふるもの愈増加し巡視者を増して冬期火災の多き時季には森林内外に物見臺を建て或は電話を架設して豫防に怠りなく此等の費用は所有地面積に按分して支出し益々其効果を期せり

○消防に必要な器具、器具を備ふことは森林火災に重大なる關係を有すること市街地の火災に異ることなく廣大なる森林火災を防がんには消火用の器具其他特殊の器械を備へざるべからず而して森林消火の器具は種々なる事情により異なるを以て一定すべくもあらず常に最も多く使用するは長柄の「ジョーベル」なり水便のある地は「バケツ」も備ふべく能ふべくは「ポンプ」も必要なり或は鶴、鐵製熊手、及伐木の爲に斧の如きは一般に使用せらる此等の必要器具常に一定の場所に置き消防隊は益消火の實力を増し亦熟練の度を進む例多數の人々を熱練なる消防隊ありても此等の器具完備せざれば効果は極めて僅少なるべし最も農家に近接せる地方なれば附近の農夫は各自「ジョーベル」斧等携帯して現場に駆けつけものなれば山間地方は山林看守人之れを

準備するものなり最も都合好きは見張所に消火器具を定置するにあり或は山岳地方にありては器具類は凡て荷棚に填裝し直に馬脊に投すべく準備し速に火災地に至ることを得此荷棚に填裝するは普通「ジョーベル」斧、手桶、鶴、網及少量の食料品を以てす而して此等の器具類は車輛積まれ「ペンシルバニア」州の火災用車は鐵製水溜をもたれ二臺のポンプと六個の「バケツ」「ジョーベル」斧等を備置せり

○消防組織、消防隊を指揮すべき監督の存すること最も必要なり善く統一せる少數の消防隊が漠然と組織せる多數の消防隊より有力なる動作をなすことは屢見の所にして適當なる人員を有するは有利の一人なれども又監督者は單に多數人を無理に使役するのみに止らずよく彼等の動作を指揮すべき技能を有するを以て最も有利となす勿論消防隊の効果は彼等の熟練及經驗によること大なれども指揮者の熱練と經驗とは更に大なれども消防隊を如何なる場所に托すべきかの智識よりも火災を攻撃する一般の方略を決定する決斷こそ最も肝要なりとす火災の性質森林の状態天候の如何風力風向火の進路等は火災に際して参考せざるべからず

○地表火の消防、小部の地表火は屢打ち消すことあり即ち主として落葉短草を焼く時なりされど灌木の稍密生せる雜木を焼くに至つては單に打ち消すこと能はざるべし毛布、上衣は打消には屢用ふれども「ブツク」の囊を時々浸水し得るならば最良の品なり常緑の枝も亦使用に都合よく一撃すれば火は二方に掃はれ燃料は再び其位置に來る上面より直接打つときは火は四方に散るものなり進行せる地表火を消す最良法は表

面に土沙を投するにあり勿論此方法は土壤輕鬆にして掘り取りの容易なる地たるべく例へば大西洋沿岸地方の如き砂土にして掘り易く火の表面に投ぐるに容易なる地たる所にありて此の如き地の地表火なれば消防隊は各自長柄の「ジョーベル」を用ひて砂土を火路に投すべし彼の皆伐林中にて針葉を燒きつゝ進行せる火の如きは「ジョーベル」の土砂はよく十呎の火を消滅せしむ輕鬆なる粘土も消火に便なれど土砂の如く有効ならず堅き土質の地は一層困難を感ず砂土又輕鬆なる砂質壤土は掘取り容易なれど往々小石を混すること少からず此の如きときは消防隊は砂又土壤を他の方法により供給すべし又崩壞物堆積して凸凹甚しき所は可成水を用ふべく水は普通遠方より運ばるるものなれば大に經濟的に有効に使用せざるべからず即ち少量の水を用ひて火勢を鈍らして然る後打ち消すを最良の手段なるべし經驗上水は手唧筒を用ふるを便とし此手唧筒もよく二十呎より三十呎を注ぐことを得て必要なる位置に正確に供給することを得其價三弗乃至四弗半にて購ふべく東北部の農家は多く之れを使用せりブツク製手桶は輕くして緻密なれば水を運ぶに便なれど一般には金屬製手桶を用ふるは其價遙に廉なればなり又丘陵を越へ水を運ぶには荷鞍の上吊上げうべき特殊の水囊を用ふる水筒はペンシルバニア州にて屢々用ゐられ水路の通る所は大樽を用ふ伐根の少き林地の地表火は枯枝落葉を一方に寄せ火の前方にて狭き徑路を設くるは其有効なり即ち火が徑路に達すれば進路を妨げ又打ち消すを得又平地皆伐地にては溝を穿ちて應急の防火線となす或は灌木を伐開き或は小徑を火の前面に作りて進行を妨げつゝ消防隊は此所に準備を揃

えて打消すを最も良法せり或場合に火勢猛烈にして直接に攻撃し能はざる時は一方に火を導きて火前火翼に消防隊を配置して防ごうとあれど可成左右より火翼の勢力を殺して遂に全く消火に至らしむるものなり

○地中火の消防、地中火は地下に埋没せる有機物の燃焼にして消防は甚だ困難なり餘り深からざる地中に植物質の埋没するときは土砂を以て表面を被覆すれば可なり反之深く燃焼するときは開溝法により火勢進行を妨ぐことを得而して此方法によれば火の速度を考へ一定の距離を隔て溝を掘り捕物質を越えて母岩に達すべく斧「ジョーベル」鶴、鐵製熊手、及伐木の爲に斧の如きは一般に使用せらる此等の必要器具常に一定の場所に置き消防隊は益消火の實力を増し亦熟練の度を進む例多數の人々を熱練なる消防隊ありても此等の器具完備せざれば効果は極めて僅少なるべし最も農家に近接せる地方なれば附近の農夫は各自「ジョーベル」斧等携帯して現場に駆けつけものなれば山間地方は山林看守人之れを

○樹冠火の消防、樹冠火は通常地表火より引き起す樹冠火は樹冠が可燃性ならずして長く連續せざるに地上に地表火を引き起すべし可燃性の物質少きときは直に消すことを得通常樹冠火は飛火多く又多くの場合に自滅する山岩地にて傾斜に沿ふ樹冠火は消防甚だ困難なり

○返し火、樹冠火は或事情の下に於ては返し火によりて消火す大西洋沿岸の松林の樹冠火は屢返し火にて火止することあり即ち返し火は樹冠を燒き拂ふを以て進行し來る火災を妨ぐものなり或は返し火が都合よく進行すれば兩個の樹冠火は途中にて出遇ひ互に進路を失ひ自滅す火勢猛烈なるときは如何に消防隊が力を盡すとも火防器具が完全すとも直接攻撃は何等の効果も呈せざるに至りては此返し火より外火防の方法あるべからず然れども返し火は萬止むを得ざる時に限り用ふるものにして最後の手段なり

八戸林學士森林行政論

伊豫新居濱 綠 山

林務總管員は前記諸機關の上位を占め總ての管理機關を統へ業務の程度方針を定め最高指揮監督を執行す、國有林に在ては勿論大私有林に在ても必要缺くべからざる機關とす職權の異なるに應じ二様の制あり

第一 獨斷制は一人の總管員全權を握て事を處斷し其下に數名の補佐員を有す

第二 合議制は一人の長員の下に數人の評議員ありて其多數決に基き事を議定す

此兩制は各得失あるを免がれず、即獨斷制に在ては事務の進行を敏捷にし且經費を節省するの益あり合議制に在ては事を處するに就き能く不公平に陥るの弊を免ぎ且其決定たるを安固確實にして殆ど算あるなく又擅横を働くの機なからしむるの利あり、甲の益とする所は即ち乙の缺點乙の利とする所は則ち甲の短所なりとす、獨逸にては獨斷制に依れる總管員を「ランドフオルストマイステル」、「オーベルランドフオルストマイステル」等と云ひ合議制に成れる者を「フオルストラート」、「オートベルフオルストラート」上長員を「プレシデント」、「ディレクター」等と稱す

國有林行政に在ては總管機關は并別の中

間位置を占むる所の獨立廳衙を形作り若其
森林面積非常に大なるときは必要に應じ數
個の廳衙を地方に分置し而して之を一般地
方行政機關の中に加ふるあり或は特別なる
廳衙を組織することあり、若其面積非常に
小なるときは特別機關を形作ることもなく單
に本省内の一部局として之を存することあり
、是等は一に國家の大森林所有の關係林
務の狀況一般政治及民情の如何に依て斟酌
すべきものにて一概に其得失を論斷すべき
にあらず、普魯西撤退に於ては獨專制を取
り之を一般地方行政機關の内に容れ巴十揆
塞に於ては合議制を採り而して巴十にては
貴族世襲林野の總管事務を合せて一個の特
別機關を作り揆塞にては大公室林を兼掌し
て大藏省の内に一局を爲す國に於ては合
議制を用ひ地方に數個の特別廳衙を開く
我國有林行政に在ては本洲四國九洲に十
個の特別機關即大林区署を置き大林区署長
は即林務總管員に當り山林技師又は山林技
手又は山林事務官中の或者其職を奉じ其職
權は獨占制にして同官名の補佐員數人を有
す權限は其配下たる小林区署長の權限挾き
に準して亦甚制限せられ殆所謂總管員たる
の格なく却て管理員たるの實あるに似たり
(完)

拔萃

林業年中行事(續)

七月之部

- 一 梅雨霽る、を待ち播種床に日除けを
なすべし
- 二 黴菌の害は多く梅雨中に發生するを

造林

- 一 春季植付の苗木にして未だ充分に根
付き居らざるものは本月の天候如何
により枯損するもの多し油斷すへか
らす
- 二 引續き下刈を勵行すべし
- 三 成林の蔓切りに從事すべし
- 四 秋季豫定箇所の測量及地檢に著手す

六

普く苗木の生育に注意し其不良なる
箇所に施肥し以て生長の一齊ならん
ことを力むべし

五

早天打續き床地著しく乾燥して苗木
枯稿の兆あれば除草を中止し適當の
日除をなすを可とす或は日出前又は
日没後土壤の充分濕潤する迄水を注
ぐべし然れども斯く灌水を開始するに
於ては爾後降雨ある迄毎日連續施行
せざれば却て害あるが故に乾燥甚し
く最早堪へ得べからざるに至る場合
の外は可成灌溉に著手せざるを可と
す(灌水に際し少量の水肥を混する
ときは爾後日々灌水せざるも能く乾
燥を防ぐことあり)

四

苗圃乾燥の虞あるときは青草を一寸
位に切截し之を苗圃に撒きすべし
左すれば能く床地の乾燥を防ぎ雜草
の發生を妨げ剩れ肥料となるの利あ
り若し青草に乏しきときは糞を代用
して可なるも糞は翌年に至り尙腐朽
せざるを以て往々害蟲發生の媒介と
なることあり

三

雜草の繁茂彌々盛なるを以て除草に
關し一層の注意を要す

五

竹林内を掘起して堆肥落葉又は葉等
の腐朽したるもの魚腸肥獸糞の屍体
骨皮其他總て硫酸及磷酸多き肥料を
施し力めて土壤を肥沃ならしめ以て
翌春に於ける筍の發生を促すべし目
黒附近の江南竹林にては七八月より
十一月の頃に於て新根の先端を地表
に露出したるときは其箇所を深さ一
尺五寸程に掘り之に腐敗せる落葉、
麥稈、麥糠の類を入れ新根を其上に
導き末端を稍上向けに土を覆ふ
之を根埋と稱し毎年怠なく之を行ふ
べし然らざれば竹根地表に露出して
良筍を生せざるに至るものなり

保

一 杉金龜蟲となりて杉扁柏落葉松櫻等
の葉を食害するが故に早朝或は日没
前低温の時に於て樹幹を掃り害蟲を
墜落せしめて之を撲殺するか又は誘
蛾燈を用ひ誘殺すべし

利

一 春伐を行ひたる杉材は既に乾燥せる
を以て上旬より之が造材に著手す但
伐材は多く樹蔭にあるが爲主伐に比
し乾燥遅るるを以て下旬若しくは八
月上旬に至り造材するを適當とす

二

北山丸太の産地に於て本月下旬より
八月中旬に亘り伐採をなし又尾鷲地
方に於て杉扁柏の伐採は夏季土用中
に行ふを常とせり凡て夏季土用入後
に於ける伐採を秋伐と稱し之を伐木

文苑

日記の一節

五月二日 吊馬車園太郎

- 一 の好季節となす蓋し杉扁柏を秋伐す
れば其樹皮は春伐のもの如く害蟲
に罹ることなきを以て約二割以上の
高價を保ち其木材は乾燥中霖雨に遇
ふこと少き爲材色美なるを以てなり
- 二 前月に引續き農繁時にして且谷川の
用水堰尙使用せらるゝ爲め地方によ
りては充分に木材の搬出をなす事能
はず
- 三 蜜蜂の巢を切り蜜液を搾り其精滓を
以て蜜蠟を製すべし但其年の氣候に
より未だ蜜液少き場合には秋の土用
頃迄之を見合すべし
- 四 本月下旬より翌年三月迄の間に尖銳
なる鉄杆を持って松樹伐採跡地に於け
る土中を衝き茯苓を採收すべし

中央西線工事竣を告げ此日祝賀の式を擧ぐ
其餘與等新聞の記事賑はしければ好奇心に
驅られ黄昏下宿を出づ國旗燈に軒頭を飾
れるは言ふも更なり花電燈さてはアーク燈
と畫をも欺きて皎々たり露店櫛比し肩摩
擊喧々囂々心狂ひ目眩まはかりなり、余
此煩を避けて町役場前古松風冷に新柳陰
淡き處に佇む偶一物の側に横はれる者ある
を見る近いて之を視ればこれなむ馬車園太
郎の遺骸なりけり色褪せ幌破れ滿身泥土に
塗れて已に此世のものに非ず難戦苦門鞭折
れ力盡きて倒れたるの色見えて哀なり余不
覺潸然として涙下り低回去るに忍びず因て
酒を取り以て祭り文を作りて之を吊す回顧

すれば余の初任に福嶋に赴くや汽車尙撞尻
に過ぎず而しては老嫗探勝の具に乏しく且
つ最も阿賂物に疎せらる故を以て價の廉に
して歩行を助くる汝の力に依頼するの己む
へからざるものあるなり思ふに世間の廣き
人間の多き余と此感を同する者蓋し少か
らざるべし或は疲勞に艱むる或は重荷に
苦むる、熱に喘ぐも病に悩むもの等一
にして足らざるべし此時に方りこの不幸の
人類を方數尺の車臺に積み一鞭疾驅能く各
自の目的地に届らしむ其惠や大其效や偉な
りと謂ふべし爾來奈良井原宮腰 漸次鐵
路の蠶食を被ふり汝の勢力範圍は日に月に
減縮し命且夕に逼るの苦しまされに或は不
當の賃金を貪りし不逞もありけん或は規定
以外の人員を詰込みたる横着もありしなる
へし或は驚馬に癩癩を起して客をして鉢合
せをなさしめ或は昨夜の惚氣話に夢中とな
り懸崖に頭墜せしめし等の失敗亦少からず
然れども其効や其罪を償ひ得て尙餘りあり
方今社會の上流に位し自ら紳士と稱する者
或わ他を陥擠して自己の榮達を謀り或は奸
商と結託して己が懐を温むる等凡る名利の
爲にはあらゆる權謀術數を廻らし敢て憚ら
ざるもの此に皆然り而して不祀の鬼となる
もの殆ど稀なるは何ぞや彼等常に世の没理
漢を稱して車夫馬丁と嘗る者巴に彼が
如し嘗るもの豈亦深く咎むべけんや況
や優勝の首位を以て自任し世界に闊歩せる
流車其ものにして現に地獄鐵道などの惡罵
を受けつゝあるに於てをや之を以て之を觀
れば仮令廣小路街頭銅像の建立なきも位階
追贈の恩典に浴するなきも徒に汝を邪魔物
視し空しく燃料に委して顧みざるの無情に
出づべけんや、嗚呼優勝劣敗熱付寒離は浮
世の常といふと雖も予等老耄世に棄てられ

たるもの一層同情の涙禁する能はざるなり
誠を致し哀を陳べて酒を薦む魂彷彿として
來り享けよ
六月十二日ろ歩きの感想
兎角情弱者に取り付き易き神經衰弱といへ
る病にもやあらん朝まだきより目覺めて寢
ねられず余儀なく下宿抜け出でようこはか
となくろ歩きの事とはなりぬ晝日中
人の往來繁き時より種々のあら見えて面白
し裏面の觀察にはこよなき手段なるべし朝
涼いと心地よく御料局前汽車の往來木會
川を隔てて見やる目覺るはかりなり人工に
成れるものにて汽車ばかり偉大なるものは
あらじ四五十の車臺の列れる様一つの市
街とも見得べしやがてこの市街がろろ、
動き出し見る、舞ふが如くに川を越え谷
を縫ひ只吐息のみ跡に残して消え行く様
譬ふるにもなし
福島の家屋は一見他の多くと異なるを見る
土壁瓦屋根極て稀にして多きは板も、圍へ
るなれば何やら普請場の掛小屋とも見えて
奥床しからず斜の道に沿へる建物など無雜
作に三角形に造りて椽板疊等之に準へるも
のもありぬべし或るは前の家の屋根棟と後
の家の土臺と接して遠くより見れば階段の
如く其他岩壁を打ち缺きて構へる家は間口
十數間もありて奥行僅一間に足らぬも見ゆ
高き道路に接するものは直に家根に跨り移
り得べく一方は懸崖絶壁目も眩まんばかり
に高く裏手は岩窟にて光線も通しかねなる
他の花園を己が顔に賞觀しつるにたもなる
主は却て見得べくもならぬなど實に百鬼夜
行とやいはましされどかゝる所にこゝ木會
の天下にもて囃さるゝものはあるなれもし
も文明の斧の痕昔からんにはあたら木會の
名も共に打ち摧かれ消え果てぬべしとぞ覺

一茶翁勸農詞 記乃志多

余一日其書を繕きて頭書の詞を得たり一讀以て忘れ難き趣あり茲に之れを掲げて諸氏の参考に供せんとす

和歌の浦 細江岫雪生

高野口より汽車にて和歌山市驛にて下車し宿をも取らで名にし負ふ和歌の浦の景を見んとて電車に乗りしは午後二時頃

一學年修學旅行日記 成瀬義郎

五月二十三日 晴天 自福嶋町至奈良市 一年生諸君に見送られて午前六時三十分の列車にて名古屋に向ふ午後〇時過ぎ名古屋驛に下車暫時休憩午後一時半三年生諸君と

此處にて淡町行き列車に乗り替ふ之より漸く吾等の懐かしき山地となり關、加太兩驛間に於て理想的の森林を見る然れ共汽車は用捨なく進行し充分の觀察を得ざりし

武天皇、石棺を埋めありしと云ふ岩窟を見崎嶇たる山道を辿りて多村の峰に到り談山神社を拜し寶物を拜覽す、峰に於て一行の撮影を爲す此あたり、實に完全なる植林地にして杉檜の混交林多く植付四五年生のもの

(一)葉面に土の附着することなし(附着したるものは枯死やすければなり) (二)根部の乾燥を少くす (三)若樹の時に結實することに就きて

午前六時三十分旅館出發若たる老杉の間を過ぎて春日神社を拜し嫩草山に至り山麓に於て一同記念の撮影をなし後山頂に登り奈良市の全影を初め微かに郡山、金剛山、畝傍、生駒の連峰等を一時に集め暫時休憩の後山を下り二月堂、三月堂、手向山八幡宮等を拜し東大寺に至る時恰も本堂大修繕中にて充分の眞景を見る能はざりしも幼時より常に想像に驅られつゝありし所謂奈良の大佛を茲に實見し得て満足せり、夫れより奈良市帝室博物館を觀覽す歴史部、美術部、工藝部等に分たれ天皇の御宸筆御物を初め繪畫、彫刻等古代の逸品を蒐集し之を時代分となして陳列し往古の工藝、美術一目瞭然たり而して大部分は國寶に屬せり館を出て興福寺南圓堂、北圓堂、五重塔等の舊都の遺蹟を探り猿澤池を見て午後一時發の列車にて畝傍に向ふ本日は櫻井驛に下車宿泊の豫定なりしも變更されて午後一時半畝傍驛に下車し徒歩にて綏靖天皇御陵、神武天皇御陵及檀原神宮に參拜し南に向ふ途中白檜村なる小松先生の御宅に立寄り茶菓の饗應を受けて暫時休憩の後出發坂台村を経て午後五時高市村字岡に着くすりや旅館に宿泊す本日道程汽車十五哩陸路三里

午前七時旅館出發當地の林業家否日本の林業家たる土倉氏と訪ね實地に就きて有益なる吉野林業談を聞くを得たり其概要左の如し

(四)苗木仮置の方法 地拵の遅延人夫の不逞等の爲め山植苗の山地に於て残り暫く仮植するには清流を選び細長き木を以て基盤形に細を以て結び各梓形の目に苗木を適當に入れ根部の漸く水に浸るを以てよしとす斯くして置くときは一二ヶ月位は完全に保存するべしと云ふ、然れば春季植付に残されたるものも梅雨の候に至り植付くる等には最も便利なる保存法なり附並通山植は三月なるも此地方にてはつゆ植と稱し梅雨期に山植をなすことあり而して根付良好にして植付後の成蹟春植に劣らざるものありと云ふ

自高市村至大瀧 午前七時出發十餘町にして右方の田間に天

(一)苗木植方 吉野にては先づ鋏を以て植ゑんとする箇所の地被物を掻きとり一鋏打ち込み其鋏先を動かして右手を以て鋏の基部を持ち苗木を左手に持ち鋏を引きぬくと同時に苗木を挿入し根の部分左右より斜に二鋏打入れて根によく土を含ませ又根より四五寸距れて側方及び下方を打固め更に上方の土と根際とに播寄せ都合十一鋏を以て植ゑ終るものとす而して苗木は山手方へ傾斜させて林際の際の屈曲を少からしむ

(五)兎害豫防の一法につきて 幼樹の樹皮を嚙む兎の害を除く爲山植後直に樹幹に松の亞皮を巻くものにして亞皮の樹幹に巻込み虞あるを以て巻き付くる際雜草類を巻込み置くものなり

木、障木及成長遲鈍なるもの其他成長過大の者等を伐採し以て林相を改良するにあり而して十年前後の間伐材は之を磨丸太、木等として京阪地方に賣捌くものなりと云ふ吾等は露着たる理想的の大森林中に入りて之等の有益なる林業談を聞つゝ氏に導かれて吉野村道に出で此處にて厚く禮を述べて土倉氏と別れて愛染峠に差しかゝり午前十一時頂上に着し茶亭にて晝飯を喫し暫時休憩の後峠を下り躰躰が岡花矢倉等の古戦場を過ぎて吉野村に出で如意輪寺に至りて後醍醐天皇御陵如意輪堂を拜し寶物を拜觀す後醍醐天皇宸筆小楠公のかへらじこの扉、巨勢金剛筆の畫像等あり夫れより葉櫻の間を経て竹林院義光の忠死せし藏王堂を拜して一目千本を過ぎ官幣大社吉野宮村上義光の墓等を経て六田渡に出で午後五時下市に着すしやに宿泊す。

五月二十七日晴天

自下市至高野山

午前七時旅舎出發奈良縣立農林學校教諭藤井先生の御案内にて石井材木店の磨丸太製造の實況を視察して農林學校に至り製陶室農科林科各標本室林産製造室等を參觀の後林科三年生諸君御接待にて茶菓を供せらる夫れより安藤林學士の經營になれる孟宗竹林及び苗圃を見る杉櫨の被覆試験播種肥料試験等重なるものなり八時半同校を辭し吉野口驛に向ふ(行程一里半)十一時吉野口驛着汽車にて午後一時高野口驛に下車高野口小林區署の許可を得て九度山官行伐木所用林道をたどりて高野山向ひぬ、途中木材運搬の實況を見る高野山より高野山麓まで約一里余輕便鐵道を布設し伐木場より山麓までは木馬道を以て連絡をされり木馬は人の牽くものと牛の牽くものとあり材は主として丸太材なり(普通人の牽くものにして

尺一十一本約七百貫なり)と本山は風致國有林にして天然林なれど其林相の整然たること人工造林も及ばざるが如し。

吾等この森林中をすぎ午後五時半頂上に達し奥の院に參拜す此あたり老杉の直徑三四尺に達するもの林をなせり奥の院より高野町に至る二十五丁の路傍には石碑林立せり午後七時頃一行は光臺院に着し僧の給仕にて精進料理に舌鼓を打てり高野町には郵便電信局あり大學林中學林あり而して電話電燈の設備あり寺院は町に連り宏大なるもの多し昔は千軒と稱せられしも現今は二百軒程なりと云ふ

五月二十八日 晴天

自高野山至和歌山市

午前六時半案内者を雇ふて總本山金剛峰寺に至り内部を拜す櫻の間(澳は狩野探幽の筆)柳の間(澳は狩野深齋の筆)弘法大師御自筆の畫像、大廣間(澳は狩野之信の筆)等を見る夫れより大學林中學林を右手に進め六時鐘樓あり此鐘は豊公が朝鮮征伐の時巨福嶋正則の分捕り來れるものなりと云ふ東塔の燒跡、弘法大師札掛櫻、大會臺、不切堂、愛木堂、三昧堂等を拜して金城に至り内陣を拜す本堂は高さ二十五間横十三間瓦は銅なりと云ふ内陣には黄金を塗れる圓柱二十六本あり欄間は天人の彫刻天井は基盤の目に仕切られ其各には四季の草花を畫かれ金色燦爛として美麗目もさむるばかりなり、本尊は藥師如來なり、堂を出で御影堂、大塔西塔、孔雀堂、六角經堂、三大山門の一と稱せらる山門を見て一度院に飯り午前九時出發本道を通りて再び高野口に下山し午後二時三十分の列車にて和歌山市に向ふ午後二時和歌山驛に着し電車にて直に紀三井寺に至り參詣し龍山明光の妹脊山等に登りて雄大なる和歌浦の絶景を

眸に集め或は波打つ際の松原を逍遙し午後五時再び電車によりて和歌山市に引返し旅舎九橋館に宿泊せり

五月二十九日 晴後雨

自和歌山市至大坂市

午前七時三十分發急行列車に乗じ九時三十分大坂灘波驛に下車し道頓堀筋九郎右衛門惠比壽屋旅館に至り荷物を置き直ちに諸々の視察に赴く先づ道頓堀筋を直進して高津宮生玉神社を拜して四天王寺に至り金堂を拜し高さ二十四丈と稱せらるる有名な五重塔に登りて大坂市の全景を眺め鐘樓を見る鐘は高さ二丈六尺指渡し一丈六尺厚さ一尺六寸目方四万二千貫と稱する大鐘にして恐らくは日本第一たるべし夫れより寶物を拜觀す弘法大師筆彦山權現額、聖德太子御自筆の畫、後白河御宸翰權現慶十二神將等あり夫れより上本町通を経て大坂城に至り許可を得て天主閣に上り天滿橋を渡り造幣局に至りて各工場を視察す場内は分拆溶解伸延植印刷秤量等の數部に分たれて頗る廣大機械の精巧複雑なる作業の迅速壯觀なる筆舌に盡せず蓋し斯かる複雑大規模なる作業の到底詳細を知り得ざるは勿論なれば造貨に對する大体の順序方法を知らるを得たり。工場を出づれば生憎雨降り出したれば巡航船に乗りて築港に向へり然るに雨は益々烈しく加ふるに船の都合上二隊となりたれば築港行を見合はせ一隊は木津川橋より一隊は天保町より何れも電車によりて旅館に引返せり

五月三十日 曇後雨

自大坂市至京都市

午前九時梅田停車場に集合九時三十分急行列車にて京都市に向ふ途中山崎驛より左方に大竹林を望む時三十分京都市七條停車場に下車し直ちに徒歩にて三十三間堂に至り京

都帝室博物館を觀覽す之奈良の夫と相伯仲し國寶多し館を出れば又も雨降り出したれば洋傘を翳して清水寺に至り何分猛雨の爲め團體の行動を執ること頗る困難なれば茲に自由行動を許可せられ或は知恩院に參詣するものあり或は直ちに旅館に向ふ者もありしが午後二時頃全部三條大橋傍なる布袋館旅舎に入れり

五月三十一日 晴 京都滞在

午前七時旅舎出發二隊に分れ一隊は小松先牛引率の許に北野天滿宮仁和寺に詣て市を距る二里半なる梅ヶ畑村に至り土地の老練家に請ひて有名なる臺杉の萌芽法及造林伐採順序等を聞き歸途金閣寺を見物して午後三時歸宿し一隊は新家先生に引率され本能寺御所北野天滿宮平野神社金閣寺仁和寺等に參詣して正午頃嵐山に至り風致國有保安林を視察して保津川を逆ること數町にして大悲閣に至り午後二時歸宿せり

六月一日 晴

自京都市至大津市

午前七時半頃迄自由行動許可十時半七條停車場へ集合三十分發列車に投じ十時半大谷驛に下車逢坂山を越えて大津市に着し三井寺下植木屋旅館に至りて中食をなし荷物を置き午後一時出發三井寺に詣て里餘にして唐崎一松に至り暫し湖上の絶景を賞し午後三時巡航船に乗じて大津に歸る

六月二日 曇後雨

自大津市至名古屋

午前七時出發栗津ヶ原を経て九時半石山寺に至りて一休し一隊は巡航船にて一隊は徒歩にて石山停車場に集合十二時發列車にて名古屋に向ふ琵琶湖畔 砂防工事は頗る吾等の目を引けり斯くして午後四時半名古屋驛着停車場ます屋に宿泊す

六月三日 曇後雨

自名古屋市至福島町

午前十一時發飯田町行列車にて歸校の途に就く途中雨となり木曾に入りて益烈し午後五時半福嶋着一年生諸君の出迎を受けて午後六時無事歸校せり

和歌

○ほととぎす 安井正夫
ほととぎすながなくやまのふかければ
われよりほかにきくひともし
うこかぬをこころのともどうきなき
いはほのうへにかめはすむらん
漫興五首 竹軒
春の夜の星をあふぎて静かなる山のまぢ
をひとりあゆめり

木も草もねむれる山のふとろにひとりさめ
たる深川の水
木立ぬひて灯の影を一つゆくこのさみだれ
の夜ふかなるころ
見たるせば火串ちひさし眠つく青葉の溪は
水黒くして
さらさらと清水たちくる水ぶねにわらひひ
たせり山の一つ家

學校通信

○伊藤先生消息 五月八日留學の途に上られし伊藤先生には其後道中恙無五月廿六日

獨逸サクセン州ターランドに着せられたり
自今同地山林學校に在學研鑽せらるる管なりといふ

○修學旅行 五月廿三日關東(第三年生江畑校長河野先生付添)關西(第二年新家小松兩先生付添)兩方面修學旅行隊は各地の視察觀光を終へ六月二日無事歸校せり

○校友會 六月十五日午後一時より本學年度第一回例會を講堂に於て開催せらるる辯士及其演題は左の通り

- | | |
|---------------------|--------|
| 高野登山 | 田中 榮一 |
| 目的實行 | 赤羽 高 |
| 智慧の使用 | 不鬼 修六 |
| 眠と死 | 内田 益治 |
| カーネギー | 三尾新太郎 |
| 御嶽登山 | 松原 好之 |
| 愛國心 | 岩瀬 幸吉 |
| 房州に於ける遊 | 神作 四郎 |
| 暑學生々活 | 原 美清 |
| 梅干の効能 | 下村 傳 |
| 旅行の一節 | 吉澤 英雄 |
| 君子的道徳と奴隸的道徳 | 征矢野余所夫 |
| 旅行談 | 代田文之助 |
| 文明につきて | 川合 清行 |
| 松陰吉田先生 | 江畑 校長 |
| 次に忌憚なき批評を一寸試みやう先劈頭が | |
| 上田君 佛蘭西にあつた動物の實例を引張 | |
| つて油断を警むる所中々話筋は面白うた | |
| が悲しい哉音聲が低い爲め後方にあつた者 | |
| には充分聞取れなかつた故に可惜面白い話 | |
| を余所に退屈凌ぎの欠伸を洩らしたは遺憾 | |
| 田中君 矢張り聲が低い如何にも口が重々 | |
| しいので話し憎うら雨君とも羨ましい程 | |

友林蘇岐

血色のいゝに最少し元氣を出したらよから
赤羽君 姿勢着眼點大によし君に至つて初
めて始終を聞いた言語をもう少し波動的に
やつたら尙更よからう
不兎君 中々雄辯家だ体がいつも斜になつ
てる最も正面になつたらよからう
内田君 題からしてなかく、奇抜だ言亦大
に聴くべし
三尾君 大体よい着眼點もよいまだ若い所
もあるが初舞臺としては確に上出来た、
松原君 聲が又少し低いと思ふ眼がもし
いゝ下を向くのが欠點だらう
岩瀬君 態度大によし話し振りが亦旨い
神作君 面白い滑稽も出る法螺も出る中々
隅には置けない人だ
原君 まゝ可もなく不可もなからう着眼點
もよかつた
下村君 有益な話だ題の平凡な所に趣味が
ある面白く聴いた
吉澤君 横須賀から日光までの旅行談中々
面白い所もあつたが後方が又分らなかつた
体を捻る所が眼に付く
征矢野君 偉く難しいような題中々達辯家
だ
代田君 聲が少し低い嫌はあつたが話し振
りは流石に旨いものだ
川合君 南極より北極が何故早く開かれた
かといふような頗る有益な話をも少し正
面にしてほしかつたが欠點はなからう
總じて言へば余り振はなかつた一般に聲が
低かろう、言語は波動的でなく棒讀的だ
ある暗記的である、由來我校には辯論部な
るものが設けられてないが然し毎月の此例
會に於て十分熱練する余地はあからう
辯論の必要たるは今更喋々するこゝろ愚であ

るにこれを自ら進んでやろうといふ者がな
い多くは級にあつては抽籤の結果否應なし
に出る者等である故に振はないこんな事
は到底駄目だ殊に抽籤なんかはよしならよ
からう余りに女々しい終りに際し諸氏の努
力を切望するゆゑから末爾ながら校長閣下
の松陰先生につきて有益な講話のあつたの
は大に感謝する次第である。燕言多謝(柳)
○校友会擊劍大會 五月二十日午後一時よ
り兩天休操場にて開催福嶋警察署松林部
長審判の下に勝負を決せり。午後四時に試
合終りて松林部長より指導を受けたり。部
員の最も遺憾とする所は指導教師のあらざ
ることなり
組合せ勝負左の如し(○勝×分)

久保	照吉	成山	養銅
後藤	貫人	岩瀬	清見
佐藤	光利	唐澤	幸吉
赤羽	高造	下村	四郎
小坂	直一	川村	龍尾
藤原	進一	飯田	清雄
吉澤	義昇	市岡	新八
前田	正一	上田	太郎
多田	義明	三尾	次郎
喜多村	明義	前田	太郎
關村	義明	伊藤	次郎
中垣	英平	小藤	太郎
原田	洋平	坂林	太郎
木下	奉藏	細江	兵衛
龜子	一藏	石曾	根四郎

石曾根四郎以上

庭球部消息 一 記者
青葉若葉に風薫る木の下影に草萌はて轉た
健兒の腕鳴る卯月六日の午をさがる一時は

第三十三回石曾根組對伊藤組よりいよいよ見
る者をして興に入らしめぬ、演習をたをし
て意氣漸くに擧りたる伊藤組一氣に石曾根
組をたをして優退しチャンヤの賞賛しばしが

千垣	中谷	長井	白岡
市岡	梅内	山田	赤澤
吉澤	藤野	天野	水野
喜多	後藤	新田	海老
多田	田村	小田	佐野
新田	多田	小田	佐野
市岡	飯田	川村	龍尾
上田	三尾	前田	太郎
三尾	次郎	伊藤	次郎
前田	太郎	伊藤	次郎
伊藤	次郎	小藤	太郎
小藤	太郎	坂林	太郎
坂林	太郎	細江	兵衛
細江	兵衛	石曾	根四郎

友林蘇岐

程は鳴りも止まざりき、あまたの敵を顔色
なからしむる渡邊の鐵砲もかるく伊藤のロ
ピングに支へられ石曾根のロピングも敵の
前衛に乗せられて零敗の憂目を見たるがせ
ひもなきこゝに於いて紅軍の優退二組に對
する白軍三組にして白軍の意氣あたるべか
らず十四回龜子組對下村組下村もさるもの
ながら龜子の鐵砲には敵すべくもあらざり
じにや苦もなくして破られ白軍の次に代る
植松組と戦ふ植松も瀧澤も老巧の士少年の
龜子組如何あらんと氣づかひしも龜子の熱
球植松大人氣なくも受け損じ加之度々のミ
ツスは瀧澤して防ぐべくはごす術もあら
せずいたすらに龜子組の名を成さしむるに
過ぎざりしは隔靴の敷に堪えざりし之にて
紅白兩軍優退組同じき數となりたれば次に
出づべき勝敗こそ天下分け目の晴戦と皆か
たづを呑む十六回川合組對今泉組後衛の新
進今泉例のドライブの掛りたるロツピング
にて或は深く或は浅く巧に敵陣を攪亂し其
の前衛伊藤亦意外にもミツス少なくて大
いにまぐれあたる川合組力を盡し或は衝き
或はネバリ變幼出沒奮戦幾多の見物人をし
て手に汗を握らしめしが惜むべし遂に斃れ
ぬ次に我校大將吉池組拍手の中に出場す川
合組を破りたる新進氣鋭の今泉組之に當り
戦を交ふる數回安藤絶妙のスマツシングを
以て敵の虚を衝き前衛吉池得意の強球もて
敵をかけなやまず而し、兩軍の前衛伊藤安
藤健闘殆んど前衛のゲームの如き觀ありし
かども安藤の打球意のごとくならず今泉の
ためにモーションを盗まれてついに打負さ
る本日の勝負は紅三に對する白四にて最後
の一戦によりて白軍の勝に歸しぬ

最後に杉本組對今泉組の番外勝負あり双方
相手場裡に陣頭に現れがたの如くに小手調
への練習も終りて勝負に入る今泉のサブ
の技妙に代田スマツシングは時に人をして
思はず絶叫せしめぬかくて一勝一敗ゲーム
ワンオールはなりぬ伊藤のスマツシング亦
猛くもけなげに見たりしも杉本の前衛の
ギャクモーションをねらひしは時に功を奉
しついにジュースアゲンを繰り返す五回の
後杉本組 勝をしめらる

杉本代田對吉池安藤組
戦順次に進み杉本代田組對吉池安藤組とな
る杉本組の呑まれしか吉池組の調子付きし
爲めか嗚呼天は遂に杉本組に幸せず月の桂
は吉池組に與へられ吉池組を此處に優退し
つりの戦況を記せば先づ第一回に杉本組奮
はす吉池のプレッシング安藤のスマツシング二
ツツ年敵をして死地に陥れぬ長に於てか杉
本組は唯守備を堅くし爲めに殊猛なる吉池
組も中々に氣を奪はれたために遂に乗するを
得ずゲームワンオールとなる思はぬ不覺取
りし杉本組も勝に乗りし吉池組もこゝに互
に沈着となり大膽なる一大活劇を演じぬ獅
子の威を現はす吉池組虎の勇を鼓す杉本組
互に鏑を削りジュースアゲンを重ねる事
六回惜しい哉杉本組の疲勞より吉池組勝を
得ゲームワンワン何條彼に勝を得しめん
奮ひ起ちて杉本組遂に勝ちてワンゲームツ
ツツオール今は最後の戦なり潔く勝敗を
決せんとて肅々たり初め代田がストップポ
レーを二ツ打ち損せしが杉本の努力に依り
斷て三点を得後にアウトボール打ちせした
めジュースとなるユースアゲンを重ねぬ

杉本意氣奮はす今泉のプレッシング伊藤の
ツスマツシング共に成効す
第三回
杉本のセーフボール代田のストップボール功
有りてか今泉の敏腕伊藤の巧技兩者相まら
して勝を得ゲームツツワン
第四回
今泉の當日の第一のプレッシングを出す見
る者眼を驚かしたるが代田失多くゲムツ
ツツオール
第五回
今は必死の戦なり最初今泉のバック二ツ續
きてネットにかゝりしがプレッシングにて
一点を加ふ伊藤のミスにてジュース
今泉の熱球は更に一点を加へしが代田馳突
一番得意のストップボールもて一点を恢復
すジュースアゲンを長引くは我れ利ならずと
て杉本代田心を併せて押しに押しよせて今
泉組を破る此に於て今泉組恨を呑んで退場
す此の戦や伊藤組が氣運れせしかの感なく
んばあらずはげめよや戦士時既に遅し亦他
日を期して散會す(終り)

○第二回大會
物々たる生氣は山野に満ちて吾人の活動を
促す臯月二日午後零時半より第二回庭球大
會は開かれ又審判官は安藤氏也劈頭第一拍

友林蘇岐

手場裡に優退となりしは小崎今井組にして次に江畑先生河野先生組意氣揚々と見る間に敵軍を敗りて優退となる海老澤吉澤組と下枝原田組の對陣は激戦の結果下枝原田組の勝に歸し伊藤水野組猛烈なる勢を以て之に當り敵を退け退却せしむ此の特陣に現れし下村征矢野組の勇將伊東水野組を撃逐せんと打ち出す球頗る猛烈を極めしが退に伊東水野組の爲めに一籌を輸し又龜子高野組之に代りて敵し散散かけ惱ましきもの敵軍哀れ屍を戰場にさらし又次ぎに植松神作組亦敗られ之に代りし山村川合組奮戰勇闘大に勉めし甲斐もなく敗北己れ憤き敵と伊藤今泉組頗る觀物なりき代田杉本組乃ち立ちて當る代田の熱球敵の後衛を驚かしめ「スマツシグ」の御得意杉本之れに乗じて敵を惱まし見事勝利を得れば意氣旺盛なる吉池安藤組出陣し龍標虎闘前衛安藤氏珍無類の熱球を出し最後の一点をして吉池安藤組の勝となりれ之にて勝負終り萬歳聲袖に散會時四時二十分なりき

○各選手短評
余はこゝに選手諸君の今回に於ける技を聊か論せん
龜子壽一君
小軀と雖も中々に擲猛なり然れ共當日は平常の如く緩急の球をわくせず出し一段の好成績なりしは喜ぶべしこゝに只打方無法に過ぎモーションを見ざるは甚だ遺憾なり近頃君の上達は着し

植松操君
君の性は女性的なり當日は平常に比して腕の動かざりしは遺憾とす病氣上りなれば止を得ず中々の上達
山村克人君
粘着力強し大概の球はとるモーションも中々よ

川台清行君
近來の新進者フセーワは殆どフルに近し然れ共バック、余り感服せず今少しモーションに注意せられよ後來恐る可き好選手たるを得ん
伊藤昇士君
余思ふ君は校中第一のた人好ならんと職務に忠實なる事他に類無く従つて其の庭球に於ける進歩も著しスマツシグは平常に似す當日は良成績なり今少しスマツシグ及びモーションに注意せられよ
今泉彌作君
君は身体長大なる故サアプはすてき也、フオーワー及びバックは確實なり
代田文之助君
校中第一のドナリヤ也かつ斯道の大家なり打ち方に力入るモーションの鈍き事スマツシグの不確實を遺憾とすストツブボレーハ最も得意とす体軀も強く恐る可きものあり
杉本直君
体軀細長なり粘着力の強き校中第一大概の球は取る今少し強く打つ事を粘着力大にして強球を得ば實に申し分無し
安藤次郎君
ハイカラ黨の旗頭兼斯道の大将なり申し分無しスマツシグは最も巧みなりバックもよし少しボレーの劣るを見るモーションもよしボレー可ならば實に鬼に金棒なり
吉池三九郎君
体軀頑強にして技術又巧なりモーションの速かある事類なくバックの練習を今少し要すフオーワーは確實なり
一般に注意すべきは無暗に強球を打つ事をやめやめて強きを要する時尙強く弱きを要する時は弱く球に緩急あるを要す妄言多罪

○寄宿舎より
越 畔
愈深緑の下白衣の三々伍々たる候となつた噴水のほとりラム子も可水も可サイダーも可なり、其奴を遠い旅の空で味ふ心地は亦一しはなりけりだ
此に先月廿三日を以て遙か關東にはた此關西に幾多研學鍛練の功を積みにして三年生と二年生とは本月三日の夕を以て無事歸舎した迎へる人迎へらるゝ人此間には互に愉快な談話が交換される留守中は格別變つた事もないらしいほんの洗濯位の所オットこいつ鬼にされてはたまらない
久し振の圖書室には相變らず東都や各地の新聞が早朝よりろれゝ愛讀家を待つてゐる其他新刊雜誌も數種各自の特長を誇り顔に並んでゐる
もうろろゝ試験の聲も蚊の遠音に聞ゆるので勉強たさゝ息りない者もあるが一方には未だ知らぬ顔の半兵衛にのんきを極めこんでゐる者もある(西寮の一隅にて)

々よバックは余程確實なり當日成績好川台清行君
近來の新進者フセーワは殆どフルに近し然れ共バック、余り感服せず今少しモーションに注意せられよ後來恐る可き好選手たるを得ん
伊藤昇士君
余思ふ君は校中第一のた人好ならんと職務に忠實なる事他に類無く従つて其の庭球に於ける進歩も著しスマツシグは平常に似す當日は良成績なり今少しスマツシグ及びモーションに注意せられよ
今泉彌作君
君は身体長大なる故サアプはすてき也、フオーワー及びバックは確實なり
代田文之助君
校中第一のドナリヤ也かつ斯道の大家なり打ち方に力入るモーションの鈍き事スマツシグの不確實を遺憾とすストツブボレーハ最も得意とす体軀も強く恐る可きものあり
杉本直君
体軀細長なり粘着力の強き校中第一大概の球は取る今少し強く打つ事を粘着力大にして強球を得ば實に申し分無し
安藤次郎君
ハイカラ黨の旗頭兼斯道の大将なり申し分無しスマツシグは最も巧みなりバックもよし少しボレーの劣るを見るモーションもよしボレー可ならば實に鬼に金棒なり
吉池三九郎君
体軀頑強にして技術又巧なりモーションの速かある事類なくバックの練習を今少し要すフオーワーは確實なり
一般に注意すべきは無暗に強球を打つ事をやめやめて強きを要する時尙強く弱きを要する時は弱く球に緩急あるを要す妄言多罪

雜報

會費領収報告

壹圓	坂本忠治君
五十錢	野知里慶助君
全	中田辰雄君
全	長谷部兵治君
全	小林桂一郎君
全	原田久保作君
三十八錢	市川左金吾君

(明治四十四年五月廿五日第三種郵便物認可)